

(写真は語るシリーズ：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0195YemenSaleh.pdf>)

(トップページ：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(MENA イスラム圏：<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/MenaOicCountries.html>)

マイライブラリー：0202

アラビア半島定点観測

2011.10.13

前田 高行

写真は語るシリーズ：ノーベル平和賞を受賞した「アラブの春」の女神



上の写真はノーベル平和賞を受賞したイエメンの民主化運動活動家でジャーナリストのタワックル・カルマンである。今回の平和賞は彼女を含めリベリアの大統領及び平和活動家の3名に与えられたが全員女性であった。

中東北アフリカ(MENA)諸国でこれまでに平和賞を受賞したのは、1978年のメナハム・ベギン(イスラエル)とアンワル・サダト(エジプト)、1994年のヤセル・アラファト(パレスチナ)、シモン・ペレスとイツハク・ラビン(共にイスラエル)、2003年のシーリーン・エバーディ(イラン、女性)及び2005年のムハンマド・エルバラダイ(エジプト)であるが、アラブ人の女性としてはタワックルが初めての受賞者である。彼女は1979年2月生まれの32歳でノーベル平和賞史上の最年少となる。このようにタワックルの受賞は初づくしであり大きな反響を呼んでいる。因みに彼女は3児の母親で人権団体「鎖なき女性ジャーナリスト」を率いている。

受賞の背景にあるのは昨年末以降中東北アフリカ地域で燃え広がった民主化運動、いわゆる「アラブの春」である。マグレブ諸国の一つチュニジア(因みに「マグレブ」とはアラビア語で太陽が没するところ、すなわちイスラム圏の西端を意味する)に出現した「アラブの春」は瞬く間に東のリビア、エジプトへと拡がった。これら3か国に共通しているのは共和制と言いながら独裁者が長期間政権に居座ってきたことであり、チュニジアのベン・アリは23年、エジプトのムバラクは29年、リビアのカダフィにいたっては41年という超長期政権であった。今年に入って事態は急変、ベン・アリ及びムバラクの両大統領は退陣、リビアのカダフィ大佐も新政権に追い詰め

らて今や風前の灯である。

革命の火はエジプトからさらにアラビア半島に飛び火し、湾岸の君主制国家バハレーン及びオマーン、そして共和制独裁国家のイエメンへと広がった。このように書くとアラブの民主化運動が西(マグレブ)から東(アラビア半島)へと広がっていったように思われがちだが、正確に言えば「アラブの春」はツイッター或いはフェイスブックなどインターネットの情報伝達手段を通じてあっという間に各国に伝染したと言ったほうが正しい。

イエメンの場合もそうである。同国はサーレハ大統領が33年もの間独裁者として君臨してきた。その結果、富と権力は大統領の血縁と彼の取り巻きが独占している。もともと1人当たりのGDPが1,200ドルという貧しい国の中で貧富の差がますます拡大し、失業者が街に溢れている。この状況に対し正義感に燃えた学生や若者たちが「33年間も同じ大統領なんてうんざりだ」とばかり体制変革の運動を始めた。彼ら大都市に住む若者たちは比較的恵まれた階層の出身であり、パソコンのインターネットでチュニジアやエジプトの革命騒ぎを見て自らも立ちあがったのである。

そのような若者の1人が今回のノーベル賞受賞者のタワックル・カルマンである。彼女の場合は生まれた時すでに大統領がサーレハだった訳であり、またジャーナリストになったことで政権の腐敗を目の当たりにしたはずである。タワックルがサーレハ政権打倒運動に加わったことはある意味で当然だった。

ただここで今回の彼女の受賞には民主化運動と女性と言う現代中東の兆候にマッチした二つの要素がからんでいることを指摘しておきたい。「アラブの春」の民主化運動は彼女や彼女の国イエメンが口火を切った訳ではなく、チュニジア、エジプトから始まった。この運動はノーベル平和賞の受賞候補となったが、その下馬評にあがったのは彼女ではなくチュニジア或いはエジプトの活動家たちであった。またアラブは今も男性主導の世界であり今回の民主化運動は若い男性たちがインターネットで呼び掛け、それに呼応して女性も街に繰り出した、と言うのが実態である。勿論タワックルが身の危険を冒してまで人権団体「鎖なきジャーナリスト」を立ち上げ、運動の先頭に立ったことは大いに評価すべきであるが、一連のアラブ民主化運動では多くのNPO活動家が参加しており、彼女の活躍だけが目立っていた訳ではない。イエメンの報道を見ても彼女の組織する人権団体が特に顕著な活動を行っていたとの記事は見当たらない。

つまり西欧メディアが名付けた「アラブの春」と言うキャッチコピーが勝手に独り歩きし、加えて男女平等が浸透した北欧ノルウェーの平和賞選考委員たちが、アラブの女性に政治意識が芽生えたと判断したことこそが今回の授賞理由の背後にあると言えよう。このことはLeymah Gbowee選考委員長長の記者会見の発言にも現れている¹。記者団が、何故チュニジア或いはエジプトから選ばなかったのかと質問したのに対し、彼の答は「ブログの発信者があまりに多すぎて誰か1人に特定することができなかった」というものであった。さらにカルマンが実はムスリム同胞団に所属していることについて問われると、「そのことは解っていたし、西欧がムスリム同胞団を民主主義と相反するものと見なしていることも理解している。しかし彼女はずっと以前から独裁者に対して勇敢に戦ってきた女性である」と答えている。この言葉に西欧人がイスラム世界とそこに住む女性をどのように見ているかが如実に表れていないだろうか？

ともあれイエメンのサーレハは今も大統領の職に居座り続けている。サーレハ大統領のしぶとさは驚異的であり、イエメン国内は内戦の様相を呈し全く先が見えない状況である。タワックル・カルマンの民主化運動—ムスリム同胞団をバックとする大統領打倒運動を民主化運動と見なすならばの話であるが—は未だ道半ばである。彼女が「アラブの春」の女神になるのか、はたまた「イエメンのジャンヌ・ダルク」になるのか、今しばらく状況を見る必要がありそうだ。

以上

姉妹編「イエメン大統領の帰国問題に悩むサウジアラビア」も是非ご一読ください)

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0195YemenSaleh.pdf>

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ Arab News on 2011/10/8, 'Arab among Nobel Peace winners'